

## キリスト教教育と私 (13)

塩野和夫

### (1)

京阪三条駅で京阪京津線に乗り換え、浜大津駅の一つ手前になる上栄町駅で下車した。路面電車の電停を思わせる小さな駅だった。1979（昭和54）年3月中旬である。長等公園を囲む山々を背景にして、路地のように狭い道を西の方角に進む。初めて歩く大津の街は何十年も変わることなく立ち続けているように見えた。10分ほどで日本キリスト教団大津教会<sup>1)</sup>に着く。教会のすぐ東側を走る中央大通や南にある JR 大津駅、その前に立つビルは、これまでの街並みとは一変した近代的な装いを見せていた。

着任前の訪問を待っていた堀川勝愛牧師<sup>2)</sup>は、挨拶もそこそこに「教会周辺を案内しましょう」と言って歩き始められた。まず中央大通を琵琶湖に向かって下り、浜通まで来る。そこで立ち止まると北側に立つ大きな建物を指し示しながら、「これが旧組合教会の会堂で、現在の白玉町伝道所です。歴代の伝道師はここに住んでいました」と教えて下さった。そこから向きを南に変えて、中町通と京町通の商店街をゆっくり歩く。1時間くらい経って教会のすぐ南側にまで来た時、堀川牧師は北側に立つ長屋を指して言われた。「現在のところ、この長屋の一番西側の家が4月からの伝道師住居になる予定です」。それは大津のどこにでも見られるような長屋だった。

---

1) 日本キリスト教団大津教会は、1946（昭和21）年7月に旧大津組合教会と旧大津同胞教会が合同して成立した。次の教会史がある。

大津教会史編集委員会『大津教会史』1969、大津教会史編集委員会『大津教会五十年誌』1996、日本キリスト教団大津教会創立60年記念誌編集委員会『大津教会創立60年記念誌』2006

2) 堀川勝愛牧師（在任1978-82）は大津教会の第3代牧師である。初代牧師は中村利雄（1933-68）、第2代牧師は原忠和（1968-78）である。なお、中村牧師の著書がある。

中村利雄『卓上の福音』大津教会、1967



- ①JR 大津駅    ②日本キリスト教団大津教会・愛光幼稚園  
③滋賀県庁    ④滋賀会館    ⑤白玉町伝道所  
⑥中央団地    ⑦浜大津駅    ⑧大津市民会館

大津教会周辺図（1980年当時）

教会に着くと、牧師と伝道師の仕事の分担について基本的な考えを聞かせていただいた。

堀川牧師 大津教会はとても仕事が多く、牧師だけでは手が回りません。

塩野 そんなに忙しいのですか。

堀川牧師 それで、牧師は礼拝における宣教（礼拝説教を大津教会では「宣教」と呼んでいた）と幼稚園の仕事を中心としたい。

塩野 分かりました。

堀川牧師 伝道師にはそれ以外の周辺の仕事、教会学校・祈祷会・家庭集会などに責任をもってもらいたい。

塩 野 分かりました。

堀川牧師 それと前任の原牧師が始められた早天祈祷会があります。月曜日から金曜日の毎朝6時から7時まで行っていますが、これにも出席してみしてほしい。

塩 野 出席してみましよう。

堀川牧師 先ほど案内した伝道師住居は最終決定ではありません。決まれば連絡しまするので、それまで待っていて下さい。

伝道師の仕事内容について、具体的には何も考えていなかった。しかし、堀川牧師の話からすると、教会学校・家庭集会・祈祷会などと着任早々忙しくなりそうである。それで4月からの仕事について、それとなく思いを巡らしていた。そんな息子に代わって転居準備を進めてくれたのが母親である。ある時仕事の合間に暇を見つけた母は、私に声をかけてきた。

母親 今から家具団地まで行くから、付いておいで！

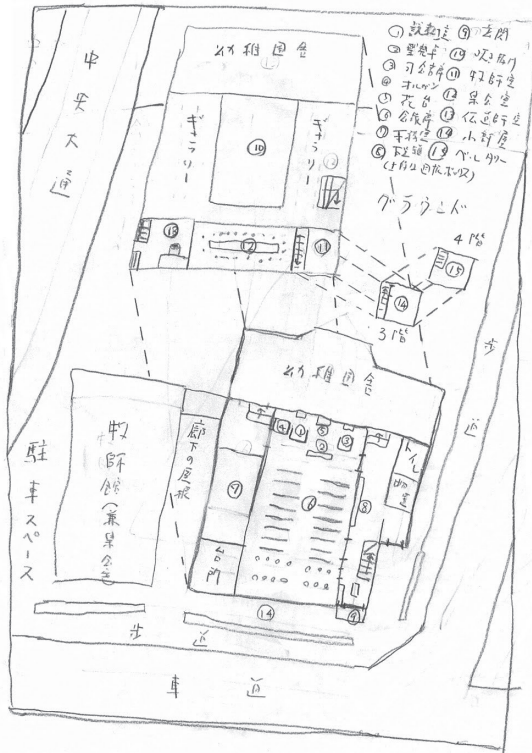
和夫 家具団地って、行ったことないな。

母親 あんたのお祝いの品を買いに行くんや。

弟の車に3人で乗って、枚方市に新しく作られていた家具団地に初めて行った。見当をつけていたらしく、ある店の前に車を止めると母親はさっさと広い店内へ入っていく。付いていくと、机といすを別々に販売しているコーナーに来た。店員と相談してまず机を、次いでそれに見合った椅子を決める。その上で事情を説明して大津の住所が決まってから、そちらに運んでもらうことにした。見たこともないような机と椅子には、「大津に行ったら、しっかり仕事をするんやで！」という両親の気持ちが込められていた。それから食卓用のテーブルといす2脚、それに冷蔵庫も揃えてくれた。

堀川牧師から電話があったので、3月28日(水)の朝から弟の車で大津に向かう。伝道師住居は中央大通を琵琶湖に向かって下り、京阪石山坂本線の手前にある中央団地に変更されていた。教会でアパートの鍵を受け取ると、団地に直行する。9階建て

の大きな建物の4階で、412号室だった。白玉伝道所の管理人をしておられた袖岡秋之助・こうさんご夫妻が6階におられるので、まず挨拶に行った。それから部屋の整理は母と弟に任せて、前任の亀田正己伝道師（在任：1974-78）<sup>3)</sup>を白玉伝道所に訪ねる。引っ越しの準備に忙しくされていたが、アドバイスを聞かせていただいた。「大津教会の歴代伝道師は、会員の高槻碩夫医師からオートバイをプレゼントしてもらっ



記憶にある大津教会（1980年当時）<sup>4)</sup>

3) 大津教会の歴代伝道師・副牧師は、次の通りである。坂井虔伝道師（1961-63）、西村義臣伝道師（1963-65）、笠井恵二伝道師（1965-66）、田中恒夫副牧師（1966-68）、多芸正之伝道師（1969-71）、北里秀郎伝道師（1971-74）、亀田正己伝道師（1974-79）

4) 階段の位置など記憶に曖昧なところについては、大津教会会員である北村充氏のアドバイスを受けた。

ている。仕事に役立つから、もらったらいい」。「このバスユニットは購入して日がたたないで、使わなくなるのはもったいない」。仕事の引継ぎを期待していた私には意外な内容だった。けれども、言葉の端々から「やりたいように、やったらいいよ」と聞こえてきた。失礼して教会に向かう。堀川牧師が待っておられ、会堂の内部を案内していただいた。2階の伝道師室の前に来るとドアを開けて、「明日から、この部屋で執務してください」と言われた。その上で教会学校を初めとした定期的な集会の他に、伝道師による奨励が予定されている4月の会合を紹介された。

アパートに戻ると、片づけられた部屋には3人分のお弁当が置かれている。遅い昼食をとると、母は弟の車で急いで帰っていった。一人残った私は仕事の準備として、伝道師室に運ぶ本とノート、それに文房具を整えた。それから駅前のスーパーに向かい食材を買う。夕食を終え洗い物も済まし目覚ましを朝の5時に設定して、布団にもぐる。うとうとしていると夢を見た<sup>5)</sup>。

まだ薄暗い早朝の道で、左側にはレンガの壁が続いている。その向こうには大きな建物も見える。工場らしい。レンガに沿った道を見ていると、急いで歩いていく中年男性の後姿が現れた。その姿からは仕事に向かう真剣さが伝わってくる。それは父だった。仕事に向かう父親の後姿である。「仕事は一生懸命にするものや。頑張るんやで、和夫!」、父は全身で語りかけていた。

\*

翌朝は5時40分にアパートを出て、教会に向かった。早天祈祷会に参加するためである。まだ暗い中央大通は意外と勾配があった。祈りつつ坂を上っていく。鍵の開けられた玄関から入り、会堂2階にある集会室のドアを開けると、2人の人がいて驚かれた様子だった。高槻（恒子）のおばあちゃんと中村真一さんである。

塩野 おはようございます。4月から伝道師として赴任する塩野です。

---

5) 参照、塩野和夫「父のこと」(『一人の人間に』80-82頁)

高槻 原忠和先生より早天祈祷会を任せられた、私が高槻です。先生のことは堀川牧師より聞いていました。今日はようこそおいでくださいました。よろしくお祈りいたします。

中村 中村真一です。よろしゅうお祈りいたします。

高槻のおばあちゃんが「私が高槻です」と言われた言葉はいかにも誇らしげに聞こえた。胸を張り、右手でポンと胸をたたかれたからである。開会まで少し時間があつたので、おばあちゃんから祈祷会の説明をしていただく。次の通りであった。

讃美歌・聖書朗読・榎本保郎『旧約聖書一日一章』<sup>6)</sup>から1章を朗読・奨励・祈り・寄せ書き（毎日、教会員1名にあててはがきに寄せ書きをして、送る）

祈祷会を終えると、お茶が用意されている。時々、中村さんの持参されるおまんじゅうもいただいた。参加者には、大場文子さん・北村初子さん<sup>7)</sup>・掛上禮子さんがおられた。帰りがけに高槻のおばあちゃんから奨励を依頼され、引き受ける。併せて、聖書箇所は創世記第1章からになった。それから1年10ヵ月、病気に倒れるまで早天祈祷会への出席を続ける。高槻のおばあちゃんは祈りの同志であり、中村真一さんは仲間となる。

アパートから朝9時には教会に戻り、伝道師室で4月に担当する集会の構想を練っていた。するとトントンとドアをノックされる方がある。「誰だろう？」と思ったら、中村真一さんだった。

塩野 先ほどは早天祈祷会、ご苦労様でした。

中村 堀川先生に頼まれて、週報を取りに来ました。

塩野 週報ですか？

中村 へえー、休まれたお方の週報です。それをお宅まで届けに回ります。

塩野 それはご苦労様です。

---

6) 榎本保郎『旧約聖書一日一章』主婦の友社、1977。榎本保郎『新約聖書一日一章』（主婦の友社、1980）はまだ、出版されていなかった。

7) 高等学校で数学を教えておられた北村さんには次の著作がある。北村初子『歌集 瞳』二弊社、1992



早天祈祷会 (1979年3月29日)

中村さんはたびたび伝道師室を訪ねて下さった。その度に表情を崩して、やんちゃだった小学生の頃の思い出を聞かせて下さった。中学生で小児まひになり、体が不自由になってからの話をする時は、どことなく沈んだ様子だった。

午後になって伝道師室の電話が鳴る。「誰からだろう?」と思いながら受話器を取ると、堀川牧師だった。「幼稚園の先生方と商店街まで、新年度の備品を買いに行きます。紹介しておきたいので、一緒に来ませんか?」というお誘いだった。ご一緒させていただく。ピクニックに出かけるような華やいだ雰囲気だった。堀川先生と堀川慶子主任が並んで歩かれる後を、若手の先生方と話しながら歩いた。帰り道に「園児とグラウンドで走りまわって遊んでもらえる男の先生がいません。時々でいいので、子どもたちと遊んでもらえませんか」と依頼される。喜んで引き受けた。

4月1日(日)の朝を迎える。教会学校は愛光幼稚園の1階ホールで行われた小学校の礼拝に出た。礼拝から分級に移る前に、西川綾子先生<sup>8)</sup>から子どもたちに紹介さ

8) その頃、西川綾子先生は小学校の教師を定年退職しておられた。





教会学校小学科で紹介される（1979年4月1日）

れる。小学科には慣れていなかったで、緊張した。翌週からは小学科・中学科<sup>9)</sup>・高等科<sup>10)</sup>のいずれかの奨励を担当することになる。聖日礼拝を終えると、牧師館の応接間で開かれた青年有志の会に出席する。数名の参加者だったが、それぞれに個性豊かで、そのためにまとまりに欠ける様子だった。会をリードされたのは古川修平さんで、みんなに問いかけながら主導していく弁舌は鮮やかだった。英語を得意とされていた。北村充さんも養護学校の英語教師をされていた。小学科の教師を担当する石倉善樹君は無口だった。彼は大津教会の会堂を建設した大工のおじいさんを尊敬し、人一倍感堂への愛着を持っていた。金子信子さんと鳥海信君は両親が大津教会の会員だった。

初めての日曜日を終え、大津教会から強く感じさせられたことがある。それは早天祈禱会で高槻のおばあちゃんや中村真一さんから受けた印象と共通していた。教会学校にしても、聖日礼拝の進行にしても、青年会にしても、責任を持って担っていたの

---

9) 中学科の担当はすでに体に不自由を感じておられた西川逸子先生（西川綾子先生の妹さん）と琵琶湖学園の職員だった七黒勝士さんだった。生徒への配慮が細やかだった。

10) 高等科の担当は市原順子先生で、古川修平さんも参加されていた。



は信徒である。主体的に教会と関わる信徒の姿勢が心に焼き付いた。

\*

4月2日(月)も早天祈祷会で一日を始める。4月に担当する4回の奨励について構想がまとまったのは、この日の朝である。自己紹介を兼ねて、「どのような出会いや経験を通して今日に至ったか」を4回にわたって証言することにした。次の通りである。

- 4月4日(水) 朝の祈祷会 「同志社と私」
- 4月10日(火) 桜野町集会 「故大里牧師と私」
- 4月11日(水) 朝の祈祷会 「召命」
- 4月18日(水) 地区別祈祷会 「病氣と私」

4月4日(水)午後6時から、会堂2階の集会室でバイブルクラスを担当する。出席者は5名程度で、教会学校の生徒(梶岡創・今井健・松下晃・田卷吾郎)とバイブルクラスだけの参加者(田中義人・池田憲治)がいた。日本語と英語が対訳になったギデオンの新約聖書を持参している。福音書から1章を取り上げ、生徒を指名し数節づつ翻訳してもらった後に説明を加えていく。英語塾のような雰囲気だった。彼らが英語の学習を目的に集まっているのは明らかだった。ところが、瞬く間にバイブルクラスの雰囲気も参加者数も変わっていく。理由はおやつだった。

4月5日(木)は、午前10時から会堂2階の集会室で訪問伝道委員会が開かれる。その日の協議の中心は新任の塩野伝道師の活動についてだった。4月の活動計画に入る冒頭で、浜本環訪問伝道委員長は趣旨を説明された。

塩野伝道師はテクシー(徒歩)です。それで各地区の委員及び担当者は塩野先生のお供をして、一緒に歩いて会員に紹介してください。時間はたっぷりとありますので、地区の状況や欠席者の事情などについても説明して下さい。

黒板には4月の予定を書いてある。いずれも火曜日・木曜日・金曜日の午後で、家庭集会と重なる3日を除いた6日である。担当者の欄はすぐに埋められた。

12日(木)	1区	膳所方面	浜本 環
13日(金)	2区	石場方面	沼尾 瑞江
17日(火)	3区	教会周辺	広田 勝子
20日(金)	4・5区	長等方面	金子きよ子
24日(火)	6区A	桜野町方面	中村フジエ
27日(金)	6区B	滋賀里方面	松原 栄

訪問伝道初日の12日(木)は、午後2時に浜本さんと膳所駅前待ち合わせる。事前に連絡してあったらしく、会員在宅の2軒では用意された部屋に案内された。聖書を読み奨励を終えると、お茶の時間となる。残ったお菓子はすべて伝道師のカバンに入れて下さった。道々、浜本さんが話して下さったのは長期欠席会員についてだった。

浜本 これからお訪ねする方は、若い頃は熱心に教会に通っておられました。けれども、結婚した先がキリスト教厳禁です。

塩野 むつかしい問題ですね。

浜本 それからいろいろありましたけれども、毎月届ける週報だけは本人に渡してもらえるようになりました。

塩野 教会の努力ですね。

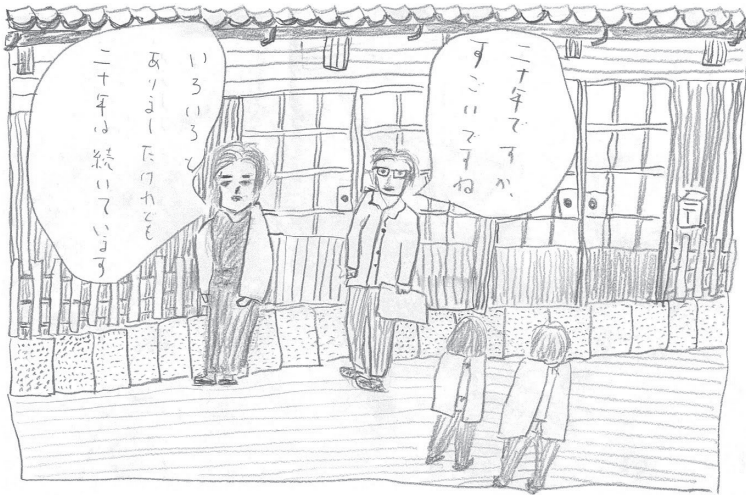
浜本 それが20年は続いています。

塩野 20年ですか。その間の努力はすごいですね。

何気なく話される「20年は続いています」に圧倒された。訪問を終えると、浜本さんのお宅にあげていただきお茶をご馳走になる。カバンの中はすでにいただいたお菓子でいっぱいだった。

4月15日(日)はイースターで、午前7時から膳所城跡(膳所公園)で祈祷会を行う。聖日礼拝では、堀川勝愛牧師の司式により塩野和夫伝道師就任式が執行された。式において教会員と伝道師がお互いに誓約を交わす。重く厳粛な空気に圧倒されながら、誓約の言葉を誓った。礼拝後、寄せられていた祝電(18通)の中から数通が紹介される。

同志社香里中学校・高等学校で教えを受けた大橋寛政先生も寄せて下さっていた。



訪問伝道に歩く (1979年4月, 膳所)

アナタガ デンドウシャトシテ タタレルヒノキタルコトヲ ココロカラオイワ  
イモウシアゲマス シツカリヤツテクダサイ オオミキョウダイシャガクエン  
オオハシヒロマサ

香里教会会員である四宮敏勝さんの祝電からは、改めて伝道師の立場を自覚させられた。

シュノオミチビキニヨリ デンドウシトシテ ゴシュウニンノヨシ オメデトウ  
ゴザイマス マヨエルヒツジニ シュノアワレミガアリマスヨウ ゴカトウクダサ  
イマスヨウニ イノリアゲマス コウリキョウカイ シノミヤトシカツ

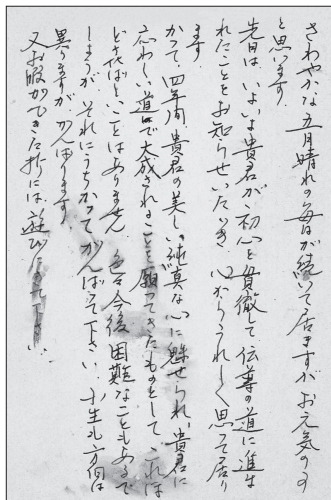
就任式を終え、しばらくしてお祝いのはがきを送って下さったのは、同志社大学の恩師 島一郎先生である。真摯な思いにさせられる言葉だった。

さわやかな五月晴れの毎日が続きて居ますが、お元気の事と思います。

先日はいよいよ貴君が初心を貫徹して、伝導の道に進まれたことをお知らせいただき、心からうれしく思っています。

かつて4年間、貴君の美しい純真な心に魅せられ、貴君に応わしい道で大成されることを願ってきたものとして、これほど喜ばしいことはありません。色々今後困難なこともあるでしょうが、それにうちかかってがんばって下さい。小生も方向は違いますが、がんばります。

又、お暇ができた折には遊びにきて下さい。



島一郎先生のお祝いの言葉  
(1979年5月8日)

(2)

伝道師室で仕事をしていると、訪ねて下さる方が毎日いた。幼稚園の事務を担当しておられた福井恵子さんもその一人である。ノックされたドアを開けると、はじける様な笑顔であいさつされる。しかし、彼女の話は「戦後の混乱期に朝鮮から引き揚げて来た両親の苦勞・引き揚げ者に対するいじめにあった経験・そのような時に教会関係者に助けてもらった思い出」など、重かった。塚本房子さんも訪ねて来ると、ソファーにどっしりと座られた。それから思い出を辿るようにゆっくりと話し出された。

わたの家は着物の販売に歩く仕事をしていました。商売に回っていると、辛いことや疲れ切つてどうしようもなくなることがあります。そんな時に、中村利雄先生が話を聞いてくださって、「ゆっくり休んでいってください」とくつろがせてくださったんです。弱さを導いてくださったんですな。生涯、忘れません。

教会学校校長の大矢正和さんも、時折のぞいて下さった。そして、実感を込めて「切に願ったことは、みなかなえられました」と話し、「ただし、貯めることはあきません」と笑って結ばれた。西海四郎さんは伝道師室に入ると、部屋の中を見回して

から言われた。「整理整頓されていないと、仕事はできません。この部屋の様子では、いい仕事はできませんよ」。会計役員の金子治彦さんは給料日には身だしなみを整えて、ドアをノックされた。そして深々と頭を下げ、言われた。「これは先生のお働きに対する教会員一同からの感謝のしるしです。どうぞ、お受け取り下さい」。袱紗から取り出された給料袋と明細書を、私も深々と頭を下げて受け取った。

4月16日(月)は午後から湖南地区教師会が膳所教会で開かれた。教師の研修と懇親の時である。参加していた教会と教師は、次の通りである。

大津東教会	関 雅人
膳所教会	阪口吉弘
石山教会	中村利成
堅田教会	川端 諭
草津教会	宮田誉夫
大津教会	堀川勝愛・塩野和夫

教師をまとめていたのは中村利成先生である。説得力を持って石山教会の創設期には質屋通いをした逸話や、「向こう見ずでないと牧師は務まらない」という持論を話されると、参加者は静かに耳を傾けていた。場が盛り上がってくると、ある牧師が「自分は日曜日の前は決して下着を履き替えない」と話し出した。すると別の牧師は「一点豪華主義」を説いて、「我が家の一点豪華主義はベッドです」と自慢する。そんな中で川端先生がとつとつとお連れ合いとのなれそめを話し出された。みんな神妙に聞いている。湖南地区教師会は文字通り、牧師の休息とリフレッシュタイムだった。

月に1回、聖日礼拝で宣教を担当する。着任時から考え続けてきた結果、ガラテヤ書を初めから宣教することにした。大学院の恩師である野本真也先生から「説教の作り方」について聞かされていた影響である。先生は話しておられた。

謝 儀	
1980年 6月分	
塩野和夫 殿	
御奉仕に對し 教会員一同としまして 感謝を以て謝儀とお届けいたします どうぞ御ゆるめ下さい。	
謝 儀	86,000 円
手 当	45,000 円
計(イ)	131,000 円
健康保険料	4,400 円
厚生年金保険料	5,005 円
退職金掛金	2,600 円
除 還金(借控)	2,250 円
信 託 税	2,430 円
計(ロ)	16,685 円
差引(イ-ロ)	114,315 円
1980年 6月15日	
日本初級福音大津社会 会計担当役 金子治彦	

謝儀明細書 (1980年6月分)

説教というのはだな、聖書のメッセージをどこまで掘り下げて聞き取っているかにかかっているんだ。だから、月曜日には原典のテキストを徹底して調べる。それから1週間、寝かせるんだな。その間に、教会員の生活の中で聖書のメッセージを考え続ける。そして、土曜日になると一気に説教を書きあげる。

野本先生から教えていただいた通りに、月曜日は一日かけてギリシャ語原典の一字一句を徹底して調べた。そうして1週間、教会活動の中に寝かせる。土曜日には、一日かけて宣教を書きあげた。次の通りである。

- |       |               |                |
|-------|---------------|----------------|
| 4月29日 | ガラテヤ書1章1-5節   | 「恵みと平安とがあるように」 |
| 5月27日 | ガラテヤ書1章6-9節   | 「転落」           |
| 6月17日 | ガラテヤ書1章10節    | 「キリストの僕になろう」   |
| 7月22日 | ガラテヤ書1章11-17節 | 「アラビアに出ていった」   |
| 8月19日 | ガラテヤ書1章18-24節 | 「神をほめたたえる」     |

\*

家庭集會を担当する日を除いて、火曜日・木曜日・金曜日の午後は訪問伝道に出かけた。夕方に教会へ帰ると、バイブルクラスと教会学校の高校生10名くらいが会堂2階の集會室でたむろしている。学校から自宅へ帰る前に、教会へ立ち寄っていたのである。彼らの目の前に訪問先でいただいたお菓子のすべてをカバンから取り出す。するとあちらからもこちらからも手が伸びてきて、あっという間に机の上からお菓子はなくなる。それからしばらく、みんなで話し合った。学校における出来事・勉強と進路について・学校で受けたいじめ・親とうまく話ができない悩み・竜が丘の坂を自転車で一気に下る時の爽快感など、思い思いに話してくれる。話し終えると、それぞれに帰っていった。バイブルクラスや高校生会は参加者が増え、雰囲気も変わっていく。

5か所で開かれていた家庭集會のうち、堀川牧師は瀬田集會と園山集會を担当された。塩野伝道師の受け持ちは、桜野町集會・竜が丘集會・山科集會である。参加者はいずれも6名前後と小じんまりとしていた。けれども、それぞれに持ち味がある。桜野町集會は京阪石山坂本線の近江神宮駅で降り、徒歩数分の中村真・フジエさん宅で開かれた。参加者のある方が手作りで持参される水無月をお煎茶でいただく和風な雰

困気があった。竜が丘集会は京阪石山坂本線の膳所駅で下車し、湖面を背にひたすら坂道を登ると開けてくる住宅地にある梶岡弘三・昌子さん宅で行われた。参加者の子弟に教会学校高校科の出席者（梶岡君・田巻君・前田君）がいたし、松下君・今井さんも近所だった。そのため話題はしぜんと高校生のことになる。山科集会は京阪山科駅で下車し、橋本滋男先生・節子さん宅で開かれる。どことなくハイカラな雰囲気があり、桜野町集会とは対照的だった。集会にはガラテヤ書のギリシャ語原典にカタカナの読みと日本語の意味を付け、1節ごとに翻訳を記したコピーを人数分用意した。それを配り、まず講義する。30分ほどで終わると、打ち解けたお茶の時間である。集会ごとに様々な話題でにぎわった。

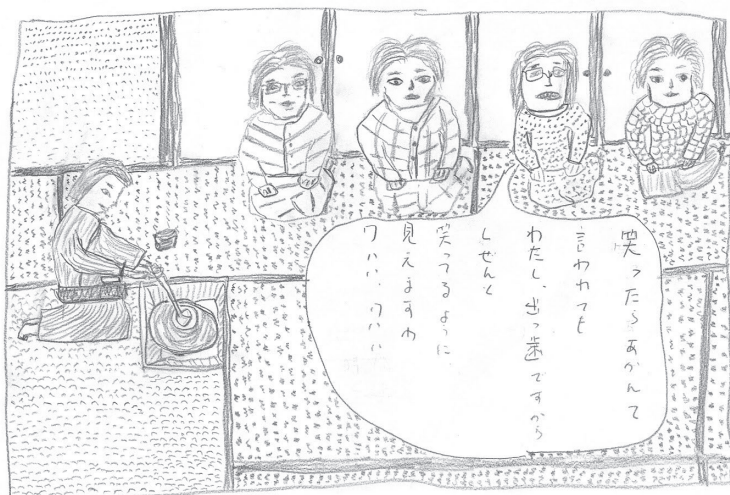
伝道師室で仕事をしていると、毎週「先生、お茶が入りましたから、休憩にきて下さい」と電話が入る。発信者は婦人会の大平富美子さんか金子きよ子さん、たまに外村澄子さんの場合もあった。牧師館の和室で行われている茶道教室へのお誘いである。仕事を中断して30分程度お邪魔する。会場には10名ほどが集まっておられて、盛り上がっている。正座して順番を待ち、お抹茶をいただく。誰かがいただいている間は、部屋の中は静寂さで引き締まっている。ところが静かになったかと思うと、すぐにあの賑やかさへと戻る。たとえば、袖岡こうさんのこんな発言に盛り上がった時があった。

「笑ったらあかん」て 言われても、  
わたし 出っ歯ですから、  
しぜんと 笑っているように 見られます。  
ワハハ、ワハハ……。

茶道教室では袖岡さんのような発言が次々と飛び出してくる。実に自由なのである。ところが、誰かがお抹茶をいただいている間は静寂さで引き締まっている。回を重ねるうちに、茶道教室に見られる静寂さと自由、「これは一体何なのか」という問いが膨らんでいった。

4月25日(水)の朝は、早天祈祷会の会場に高槻のおばあちゃんの姿がなかった。それで中村真一さんが準備をして下さり、祈祷会を始めようとした時である。ボタン





お茶の時間（牧師館の和室，1979年5月）

と教会玄関の戸を開ける音が聞こえ、間もなく少し取り乱したおばあちゃんが来られた。祈祷会后のお茶の時間には、みんなで高槻のおばあちゃんの話に耳を傾けた。

私は毎朝3時に目を覚まします。

それから30分間は、手をさすり、足をさすり、体を動かす準備をして、布団から出ます。

手押し車を押しながら家を出て、教会に着くのは5時頃です。

それから、ゆっくりと祈祷会の準備をしながら、皆さんが来られるのを待ちます。

「この私が高槻です」と自信に満ちて自己紹介をされたおばあちゃんから、初めて日常生活を聞かせていただいた。あの日以来、彼女が早天祈祷会に遅刻したことは一度もない。けれども80歳を越えて責任を負うために、どれほど彼女が真剣であるのかを知らされた。あの日からおばあちゃんはおりおりに体の衰えや自分の弱さを、祈りの中で打ち明けられるようになる。

自転車で訪問伝道に出かけた唯一の地区が瀬田である。膳所から近江大橋で東岸の瀬田へ渡り、JR 東海道線をくぐって柴崎庸子さん宅（一里山）に着く。柴崎さんは最初だけ教会から自転車でご一緒下さった。訪問が広範囲に及ぶ時は、引き続き自転車で回った。周辺地域を訪問する場合は、歩いて回る。道々伺った話しの多くは、ご家族に関してだった。なかでもお連れ合いの描かれる絵について話される時は、温かい気持ちが伝わってくる。お宅を失礼する際には、柴崎さんはタッパにいっぱい詰めたおかずを持たせて下さった。ありがたかった。

桜野町周辺を案内くださった後、お宅で面条修子さんから伺った話も忘れられない。

大津のあるお寺には、仏像など優れた仏教の作品があります。

ところが、そのほとんどは作者が分からないんです。

作られた方々にとって自分の名前を残すよりも、

後世に作品を伝えることが大切だったんですね。

奥ゆかしいことだと思います。

大津駅に近い梅林におられた沼尾瑞江さんのお宅の前には、川が流れている。その土手で花を育てるのが沼尾さんの趣味だった。

ここで花を育てていますと、「ご苦労様」とか、「きれいですね」って声をかけて下さる方がおられます。それがうれしくて、花を育てているのです。これまでにどれほど吃驚させられてきたか分かりません。だから、心の伝わる一言がうれしいのです。

熊谷黎子さんは、大津日本赤十字病院に設けられていた養護学校の先生だった。熊谷さんから教会に関心を持つ女子高校生を紹介されたのは6月である。そこで毎週、教会学校の始まる前に高校生2名と彼女を訪ね、車いすを借りて教会へ案内した。何回か通ううちに、女子高校生は自分の病気について話してくれるようになる。それによると、「彼女は体の筋肉が少しずつ動かなくなる病気」で、「すでに歩行は困難になっていた」。ところが、病気を聞かされた私たちは戸惑うばかりで、柔軟に対応できなかった。そのためお互いの意思疎通を図れなくなり、1か月ほどで女子高校生は

教会に来なくなる。それからしばらくして、目に障害を持つ女子高校生が教会に来た。心を痛める失敗を経験していたので、特に女子生徒が意思疎通を図れるように気を使っている。そのような努力もあって目に障害のある女子高校生は教会学校に通い続け、夏のキャンプにも参加した。

この夏もキャンプのシーズンだった。8月4日(土)から5日(日)にかけては、ミニクックのキャンプが朽木村キャンプ場で開かれる。初日にマタイ福音書5章9節から「平和を作り出す人」について話をした。5日(日)夜から6日(月)にかけては磐上教会の夏期修養会に招かれ、参加する。5日夜に、ネヘミヤ書から祈りについて講演した。8日(水)から9日(木)にかけては、教会学校小学科のキャンプが同志社唐崎ハウスで開かれる。開会礼拝とキャンプファイアーを担当した。21日(火)から23日(木)にかけては、教会学校中学科・高等科とバイブルクラス合同のキャンプが、安曇川リクリエーションセンターで行われる。「青少年の自殺」がテーマで、講演を試みた。24日(金)から26日(日)は青年会キャンプが安曇川リクリエーションセンターで、「なぜ、今、教会にいるのか」をテーマに開かれる。1ヨハネ1章1-4節から講演を行った。

一連のキャンプを終えた8月下旬に、堀川牧師に一つのお願を申し出て了解を得た。それは「板倉さんのお宅で開かれている茶道教室に通うため、火曜日は午後5時で仕事を終わらせていただきたい」という希望である。

### (3)

9月になると、火曜日・木曜日・金曜日の夕方に会堂2階の集会室で塩野伝道師の帰りを待つ高校生はさらににぎやかになる。「ジャンケンポン、アッチムイテホイ！」などと、ゲームに興じる声が周辺の道路まで響いてくる。おやつを広げると一瞬静かになり、それからみんなで話し合った。堀川牧師の了解を得ていたので、事情を説明し火曜日はみんなを残して早い目に教会を後にした。

滋賀医科大学の学生である木築野百合さんが教会を訪ねてきたのはその頃である。彼女の母親は豊中教会牧師夫人の村山裕子さんと友人だった。それでお母さんからの勧めもあり、教会を訪ねてくれた。滋賀医科大学学生の木築さんの弟や川田陽一君も教会に立ち寄るようになる。なかでも川田君は、大学の帰りにしばしば伝道師室を訪ねてくれた。

大津教会では月に1回、週報の発送作業を行っていた。その日も2名の教会員と会堂2階の集会室で発送作業に取り組もうとした時である。会堂玄関の戸をドンドンとたたく大きな音がした。様子を見に行ったら大平富美子さんから、「先生、様子の変わった人が玄関に立っています。警察を呼びましょか」と尋ねられた。「どうしたのか」と戸惑いながらも、大平さんには「いや、私が出てみましょう」と答えて、玄関に行った。すると手にナイフを持った男性が、不安そうな顔をして玄関に立っている。

塩 野 どうされましたか。

訪問者 刑務所から出てきたところや。ナイフを持っていると、何かしてしまいそうで、それで教会を訪ねてみた。

塩 野 人を傷つけたら、取り返しのつかないことになります。ナイフは私が預かりましょう。

すると訪問者は素直にナイフを差し出したので、受け取った。その時、明らかに彼の表情は変わる。

塩 野 お見かけしたところ、お腹がすいているのではないですか。

訪問者 お腹もすいているし、北九州まで行くお金もない。

塩 野 分かりました。教会では仕事をしてもらって、その報酬としてお金を差し上げることになっています。ちゅうど今、仕事を始めたところです。手伝ってください。そうしたら、お金を渡すことができます。

訪問者にはまず食事を提供した。それから週報を封筒に入れたり教会周辺の草を抜く作業をしてもらう。彼は教会を後にする時、「お世話になりました。ありがとうございました」と言って、頭を下げられた。ナイフは大平さんに処分してもらい、彼の無事を祈った。ところが数日後に、播州地方にある刑務所から「こちらに収監した人が『数日前にそちらの教会でお世話になった』と言っているのですが、……」と電話がかかってきた。

大津教会に着任した折に、母親が持たせてくれた着物が3着ある。一着は成人式に作ってもらったもので、深い緑色をした着物で夏と冬の間に着る。一着はちりめんで紫がかかった緑色をしていて夏に着る。もう一着が深い紺色をした大島紬で、冬に着る。それに黄色の帯もあった。茶道教室最初の出席となる9月4日(火)は、地味な間物に着替えて出かけた。7時から始まる教室には、私を含めて6名の生徒がいた。3人は女性で、20歳代と思われる2人はお稽古ごとに通っているらしい。中年の女性は助手のような立場の人であった。男性の一人は30歳前後で庭造りを職業としていた。もう一人は定年後の60歳代と見える方で、趣味として楽しんでおられる様子だった。板倉さく先生は期待していた通り作法も教えられたが、茶道の精神性を教えようとされていた。一服のお茶を介した亭主と客人の一期一会の豊かな語らいに始まり、活かされているお花や使われたお茶碗をめぐっても会話が交わされた。あっという間に片づけの時間となる。

教室の終わる8時半の少し前になると、板倉宗悦先生が姿を見せられる。そして、ご指名によりなぜか一人だけ残された。それから宗悦先生と2人で過ごす時間が、30分から1時間、1時間半と長くなっていく。若い日に絵描きを目指した先生は、東京で安田鞠彦に師事された。けれども、先の大戦で望んでいた道は閉ざされる。生活のため故郷の滋賀県に帰った先生は、膳所高校で書道の教員を15年間務められた。そんなある日、偶然京都で見た禅画から思いもしなかったインスピレーションを与えられる。それが感動を一気に筆に託して表現する絵画であり、絵を学び書に打ち込んだ先生に開かれていた可能性であった。そのようにして折々の感動を一気に描かれた作品を1点2点と拝見し、宗悦先生と議論を重ねた。絵を見つめながら先生が深い思いを込めて語られたのが、「美しさ」であり、「生命力」であり、「感動」であった<sup>11)</sup>。

茶道教室で板倉さく先生から印象深く伺った2つの話がある。

わび茶の精神として千利休の教えた「和敬清寂」という言葉があります。この教えの最後にある重要な「寂の精神」について、「利休が教えた」と伝えられている話があります。春が来ているのに、まだ雪の深く残っている土地です。けれどもよ

---

11) 参照、塩野和夫「私の宝」(『一人の人間に』67-68頁)



茶道教室で (板倉宗悦・きく先生宅, 1979年9月)

く見ると、積もった雪には割れ目がある。その割れ目の下を水が流れていて、さらによく見ると流れの周辺では落ち葉の間から新芽が育とうとしている。利休はこの落ち葉と新芽に注目して教えたのです。「寂の精神とは、自らを枯らしながら新芽を育てようとしている落ち葉のようなものである」。

深いですね。

茶道にはキリスト教との関わりがいろいろと指摘されています。それが実は「千利休にまでさかのぼるのではないか」と私は考えています。よく知られているように利休は堺の方です。当時、商人によって治められていた堺は自由な都市で、キリスト教も盛んでした。ですから、利休が堺でキリスト教に出会っていたのは間違い

ありません。そして、キリスト教から学んだ真実を茶道の中に取り入れた。それがわび茶をさらに深くする。私はそのように考えています。けれども、しっかり研究してそれを発表するまでには至っていません。ただ、「そのように考えた人がいた」ことだけは覚えていてほしいのです。

板倉宗悦先生は初めのうちは比較的新しく描かれた絵を拝見させて下さった。しかし、回を重ねるごとに絵の種類は多彩になり、話題も広がっていく。ある時は、安田鞠彦先生のもとで修行していた時に描かれた大きな作品を見せて下さった。それは安田先生の絵を模写されたものだった。圧倒される見事な絵画を前にして、先生は言われた。

これは安田先生の作品を模写させていただいたものです。苦心して苦心して、描きあげました。例えば、周辺にある色です。澄み切ったこの色を出すのに、どれくらい時間をかけたと思いますか。

ある時は素朴な形と色彩であるのに、「何かが違う」と思われる大き目のお皿を出してきて言われた。

日本が生み出してきた芸術で、最も優れた一つは間違いなく陶芸です。このお皿は本来私などが所有するようなものではありません。日本でも大変優れた陶芸家の作品だからです。このお皿も美しく、大変優れています。ところが、ここに美と倫理をめぐる問題があります。美というものは根底に倫理が通底していて、「そうしてこそ人の心を打つ美が生まれる」と私は考えます。ところが、このお皿の作者である陶芸家は本当に優れた作品を世に出している。それらは実に美しい。けれども、彼にはいくつも倫理的な問題がある。そのような問題を抱えながら、どうしてあのように美しい作品を生み出すことができたのか。美と倫理をめぐる問題が私にはどうしても分からないのです。



板倉さく・宗悦夫妻から多くを学ばせていただいた。しかし、茶道教室は1980年3月までしか続けることができなかった。

\*

滋賀県伝道協議会（「滋伝協」と呼んでいた）主催によるキリスト教信徒大会が、9月15日（土）に今津郡民会館で開催された。午前中には今西誠也牧師による開会礼拝（1ペテロ4章12-19節、「宣教の根拠」と奈良林祥氏による講演「現代の性の現実を踏まえて、どう生きるか」があった。希望者は昼食後に竹生島へ渡り、散策する。竹生島で一緒いただいたのが、松原武夫・栄夫妻である。「牧師を育てる教会」を目指しておられた松原武夫さんは、私の名前を挙げ祈って下さっていた<sup>12)</sup>。祈祷会・婦人会・読書会などにも参加されていた松原栄さんは訪問伝道で一緒する際に、つらく悲しかった出来事やうれしかったことを具体的に聞かせて下さった。



松原武夫・栄夫妻と（1979年9月15日、竹生島で）

---

12) 松原武夫・栄夫妻の生き方については、塩野和夫「歴史に記憶される人間像―松原武夫・栄の生涯を読み解く―」（『キリストにある真実を求めて 出会い・教会・人間像』205-331頁）参照。



北田裕彦さん（後列左端）・撮影者（中村真さん）  
（武奈ヶ岳にて、1979年10月10日）

大津の10月10日（水）は大津祭に盛り上がる。曳山の行列に参加する大津教会会員や、客人に振る舞う食事準備に一日中追われる婦人会会員がいた。そんな騒がしさを後にして、壮年会の若手と白百合会のメンバーを中心に比良山登山に向かう。指導者は北田裕彦さんで総勢10名だった。ふもとの湖西線比良駅で下車すると、武奈ヶ岳（1214メートル）を目指す。急がず何回も休憩を入れて、ゆっくりと歩く。それでもきつかった。ようやくたどり着いた頂上で昼食をとると、すぐに下山である。ところが、そこで思わぬハプニングに襲われた。藪の中に道を見失ってしまったのである。みんなの間に不安が広がっていく。しかし北田さんに動揺した様子はなく、冷静に指示を出された。彼の指示に従ってしばらく行くと、山道に出た。「あの時、一番ほっとしたのは北田さんに違いない」と私は思った。下りは疲労が足にくる。帰りの湖西線ではみんな静かだった。

11月23日（金）午後には沢正徳さんと松下千左子さんの結婚式が挙行され、司会を担当した。式のプログラムはほとんど同じだったが、結婚式には意外と個性が出る。沢・松下の結婚式にはトロンボーンの祝歌があり、後奏は大津シンフォニックバンドによる演奏だった。1980年9月28日（日）午後には生駒正隆さんと西田和子さんの結婚式が行われ、司会を担当する。この式では友人の市原泉さんが奏楽をされた。式後の参会者への新郎新婦紹介と祝電披露は、市原順さん（泉さんのお父さん）にしてい

ただいた。10月19日(日) 午後に中村晶さんと田中葉子さんの結婚式が行われた。式後に共済会を代表して松原栄さんが新郎新婦に向けてお祝いを述べられた。式場に響く言葉にはリズムがあり、美しい音楽を聴いているようだった。

\*

クリスマスシーズンを迎える。12月の家庭集会は5か所すべてを堀川牧師の車に同乗して参加した。まずケーキ屋に寄り、注文していた丸く大きなケーキを受け取ると会場へ向かう。集会では通常とは入れ替えて、堀川牧師が桜野町集会・竜が丘集会・山科集会を、塩野伝道師が瀬田集会と園山集会を担当した。集会を終えて車に乗り込むと、決まったように堀川牧師は「いやあ、クリスマスシーズンはケーキ責めですね」と口にされるのだった。

バイブルクラスのクリスマス祝会は12月18日(火) に行った。バイブルクラスの参加者・教会学校の高校生・青年会メンバーなどに加えて、大津東教会の市原泉さんも



バイブルクラス・クリスマス祝会  
( 会堂2階集会室において、 )  
( 1979年12月13日 )

加わってくれさった。一部ではキャンドルサービスを静かに守る。続いてみんなで作った食事をいただきながら、ゲームを楽しんだ。

12月24日(月) 夜は青年会のメンバーが教会に集合した。日頃は見かけない青年もこの日は顔を見せている。讃美歌を練習し打ち合わせを終えてから、教会近辺の会員宅を回った。讃美歌を数曲歌ってから、最後に歌ったのがこの曲である。

We wish a merry Christmas

We wish a merry Christmas

We wish a merry Christmas

And Happy New Year

この夜は鳥海信君や石倉善樹君、金子信子さんの顔が輝いていた。

12月25日(火) 夜は市内のカトリック教会・聖公会・日本キリスト教団所属教会合同の大津市民クリスマスが、市民会館大ホールで開かれた。この年にメッセージを担当されたのは、堀川勝愛牧師である。大津カトリック教会のシスター・マリエリス指導によるページェントは盛り上がった。



大津市民クリスマス  
(大津市民ホール大ホール、1979年12月25日)

(4)

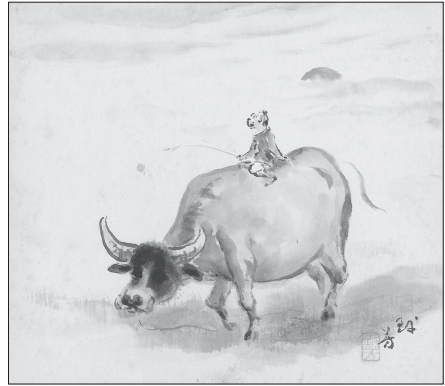
2か月に一度、寝屋川十字の園へ出かけていた。説教を担当するためである。1980年2月7日(木) もいつものように出かけ、創世記1章1-3節をテキストに「光あれ」と題して説教した。ところが、途中から「何か会場の様子が違う」と気になり、「そうだ、松山到芳さんがおられないんだ」と気づいた。礼拝を終えて応接室に引き上げると、内本さんと中年の女性が待っておられた。

内本 こちらは松山到芳さんのお嬢様です。

女性 松山の娘です。父は亡くなりました。

塩野 それは残念です。お父様とお会いできるのを楽しみにしていました。

女性 昨年の暮れに、新しい上布団を父にプレゼントしていました。そうすると新しい布団のシーツ一面に、バラの花園を描いていたんです。それが父の最後の作品となりました。父のベッドに掛けてありますので、塩野先生にもぜひご覧いただきたいと思います。



松山到芳作「水牛の上で遊ぶ幼児」  
(寢屋川十字の園で、1980年2月7日にいただく)

それから内本さんに案内していただいて、松山到芳さんの部屋へ行く。ベッドに掛けられていた上布団には一面にバラが描かれていた。枝を張り、葉を茂らせ、可憐な花を咲かせている。人柄が偲ばれる上品な絵だった。帰りがけに色紙を3枚示され、「父の記念に、どれか1枚をお持ち帰りください」と勧められた。迷うことなく、水牛の上で遊ぶ幼児の色紙をいただいた。

3月9日(日)には地区の交換講壇で堅田教会へ出かけた。町の中心あたりと思われる場所に建てられた教会堂は落ち着いたたたずまいを見せている。受難節に入っていたので、ルカ福音書22章54-62節をテキストに「探し求める神」と題して説教した。会衆席の後ろ左側に座っておられた牧師夫人が、それとなく気を配っておられる。川端牧師から馴れ初めを聞かされていた方である。11月9日(日)にはやはり交換講壇で宮田誉夫牧師の草津教会を訪ねる。堅田教会とは対照的で教会の立つ地域には活気があり、教会の雰囲気にも若さを感じた。ネヘミア記8章9-12節をテキストにして、「主を喜ぶ」と題して説教する。

日本バプテスト連盟関西地方連合の招きを受けて、1980年度少年少女春の修養会に奈良にある生駒聖書学院へ出かけた。3月28日(金)から29日(土)にかけてである。「本当の喜びとは」を主題として、28日の開会礼拝と主題講演1「すると光があった」、29日の早天礼拝と主題講演2「僕たちにとって」を担当した。参加していた中

学生と高校生は信仰上の関心や社会的問題意識を持っていて、積極的に話し合っている。幅の広さを感じさせられた。

\*

1980年度に入ると、教会員から励ましの言葉を受けるようになる。

大場文子さんは早天祈祷会を終えた後、私を見つめながらしっかりした口調で語りかけて下さった。

塩野先生、強くなってください。

伊吹敏明さんはこのように言われた。

キリスト者にとって訓練とは、共に成長することだと思います。

高槻のおばあちゃんも早天祈祷会を終えた後、じっと私を見つめて忘れがたい言葉をかけて下さった。

塩野先生は黙々と仕事をされておられる。その姿は愚鈍とも見えます。しかし、愚鈍な人が大成するのです。

松原栄さんと訪問伝道に歩いた後、お宅に寄せていただいた。失礼する前に、栄さんは祈って下さった。

塩野先生が存分のお働きをなされるのが出来ますように。

5月11日(日) 午後には津教会で結婚式を挙げた。相手は豊中教会会員でドビッシーを演奏したあの女性である。司式 堀川勝愛牧師、仲人 村山盛敦牧師・裕子夫人であった。準備委員の伊吹敏明さんや鈴木靖将さん<sup>13)</sup>がすべてを取り仕切って下さ

---

13) 鈴木靖将さんは画家で、『ともしび』(日本キリスト教団出版局, 1980)の絵など、多くの作品がある。

る。滋賀会館中ホールで開いたお祝い会は会費500円で、小僧寿しが出された。ただし、お祝いのケーキはミニクックの関係者による手作りである。300名を越える参加者があった。参加者の中に同志社香里中学校の同級生である K 君<sup>14)</sup>の姿が見える。彼はお母さんと出席していた。お祝い会で「あんたが大将」の替え歌を歌ったグループの中には、K<sup>15)</sup>の元気な姿があった。新婚旅行では長崎にある活水学院の東山手校舎を見学する。活水女学校の卒業生である妻の母から常々、「女学校の入学式でね、校長先生が『この学校には宝が隠されています』と語ってくださったのよ」と聞かされていたからである。なお、母の同級生が校舎をていねいに案内下さった。

大津教会では池田しかさんの告別式（1979年7月）や宮本たけさんの告別式（1979年12月）の司会を担当する。それらも重く厳粛な式だった。しかし、1980年5月25日（日）午後に執行された遠藤俊彦氏の告別式は、それまでの経験とは異質の重さがあった。お連れ合いと小学生の子息2人を残して亡くなられたからである。重苦しく沈みこんだ空気が会場を覆っている。司会者の祈祷は言葉にならず、たどたどしくしか祈ることができなかった。

夏の行事に入る前に、堀川牧師から折り入ってのお願いを受ける。宣教委員会（委員長：中村光夫）は、白玉町伝道所の土地売却金を原資として愛光センター建設の構想を練っていた。春からは募金も始めていた。「秋からいよいよ本格的な宣教委員会の活動が始まる。そこで、教職の立場で委員会に参加してもらえないか」という依頼であった。委員会にはそれまでも参加していた。しかし定例の委員会に加えて、秋からは各地への調査活動も始まる。仕事量は格段に増えるに違いない。それで「大津教会における仕事はすでに限界にきている。これ以上に活動量を増やすと身体が危ない」と考えた。そこで、健康上の理由で即答を避けた。

\*

この夏もキャンプの連続だった。教会学校小学科キャンプ（7月26日-27日、同志社唐崎ハウス）、バイブルクラスキャンプ（8月4日-6日、朽木村）に続いて、能

---

14) 中学校の同級生 K 君については、以下を参照。「キリスト教教育と私 (12)」(『国際文化論集』126-128頁)

15) 「あんたが大将」の替え歌を歌ってくれたグループの一員である K については、以下を参照。『キリスト教教育と私 中編』123-126頁



登川梅花キャンプ場で教会学校中学科・高等科キャンプ（9日-11日）が開かれる。ここでは誰一人としてお客様はいなかった。生徒も教師もみんな何かを担当する。休み時間に湖岸に出かけていた中村健さんが、「20年前にはシジミがいっぱい取れたんだけど」と言って空のバケツを下げて帰ってきた。最後の掃除の時間に「おいシオノ、掃除せんかい」と放送が流れる。松下晃の声である。彼の放送にみんな大笑いした。8月19日(火)-21日(木)には、琵琶湖畔で開かれた献身キャンプに参加する。美藤章牧師や佐藤興紀牧師が若手だった。詩篇136編1節をテキストに、「僕にとって献身とは」と題して講演した。青年が信仰や献身について真剣に話し合える場だった。

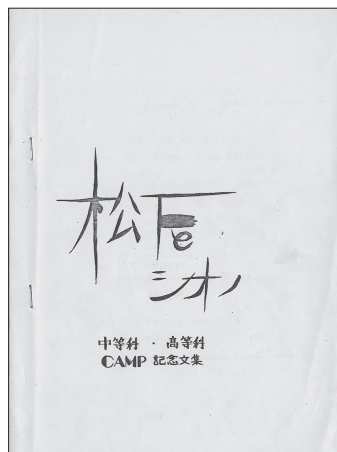
夏期休暇最後の8月30日(土)に、枚方市三ツ矢に柴田勝正さんを訪ねた。宣教委員会への参加について、柴田さんの意見を聞くためである。思いもしなかった助言が返ってきた。

なあ、シオノ！

人間、大きな仕事のできるチャンスはそうそう巡ってくるものやない。今回のセンター建設はそういう仕事やと俺は思う。チャンスに出会ったら、全力で、それこそ生命を張ってその仕事に向かえ。大きな仕事一つをやり遂げるのは大変や。けどな、そういう仕事を一つ乗り越えたら、それがシオノの自信になる。自信がつけば、また次の仕事に向かっていける。

もし、失敗したとしても、死ぬことはないやろ。全力で打ち込んだ仕事は、失敗したとしても必ずこれからのシオノの人生の何かになる。

やったらええやないか、シオノ！



「松下とシオノ  
— 中学科・高等科 CAMP 記念文集 —」  
(1980年8月、能登川梅花キャンプ場)



滋賀県信徒大会（膳所教会、1980年9月15日）

滋伝協のキリスト教信徒大会が9月15日(月)に膳所教会で開かれる。開会礼拝担当の阪口吉弘牧師はルカ福音書16章19-31節をテキストにして説教された。アジア学院の高見敏弘先生は「世界の飢えの中で」と題して講演された。講演ではまず自らの満州からの引き上げとそれに続く貧しかった少年時代を総括して、「人の心が父親だった」と語られた。その上で、「世界の飢えに取り組む働きに神の業が現されている」と主張される。会場が大津市内だったので、大津教会の会員が多く参加していた。

\*

視力障害者の和気キミさんは評判の良いマッサージ師である。彼女はしかし、その頃すでにお連れ合いと一人娘を亡くしておられた。それで知的障害を抱えた青木あやさんと琵琶湖疎水が流れ込む地域にあるお宅で共同生活をしておられた。互いに弱さを持つ二人は、いつも寄り添うように歩いておられる。その姿は絵になった。彼女の愛唱讃美歌は「人生の海の嵐に」だった。

沼尾さんの案内で訪問活動を終えると、いつものようにお宅にお邪魔しお茶をいただいていた。その時である。沼尾さんが切り出された。



深い悲しみ（沼尾瑞江さん宅で、1980年11月）

沼尾 なぜ、私たちが大津教会に通うようになったか、先生はご存知ですか。

塩野 知りません。

沼尾 それはね、……教会学校のキャンプに行った琵琶湖で、私たちの息子が溺れて死んだからなんです。

塩野 そんなことがあったのですか。

沼尾 その時の牧師さんは中村利雄先生で、中村先生は何度も何度もお詫びにきて下さいました。

塩野 お詫びするしか仕方がなかったんだと思います。

沼尾 そうしましたら、主人が中村先生の態度に誠意を感じたんです。それで私も大津教会へ通うようになりました。

塩野 不思議な話ですね。

沼尾 これは誰にも言ったことのない話なんですけれども、……。

私は息子が溺れた湖岸へ行きました。そして誰もいない湖岸を見つめて、息子の名前を何度も呼びました。何も返ってはきません。……代わられるものなら、代わってやりたかった。……。

塩野 ……。

11月30日(日) 午後には滋賀里の中村光夫・富枝さん宅へ出かけた。新築祝いをするためである。ルツ記1章1-5節をテキストにして、新しく建てられたお宅で営まれる家族生活への祝福を祈った。式後には富枝さん手作りのうどんをご馳走になる。温かくておいしかった。

秋から宣教委員会の書記を引き受け、愛光センターの活動とそれに必要な設備を検討するための調査活動にも積極的に参加した。この年の秋には2か所を調査訪問する。まず、洛西ニュータウンで開拓伝道に取り組まれていた尾堂牧師である。先生は「団地伝道を考える」と題して話して下さった。もう1か所は平安教会の小野一郎牧師である。先生は教会を四条烏丸から岩倉へ移転したいきさつを紹介したうえで、岩倉での新たな活動について話して下さった。調査を終えると宣教委員会に報告し、協議を続けた。ところが、秋も深まった頃に教会の状況が一変する。「急激に物価が上昇する時は、調査などしている場合ではない。そんなことをしていたら、貨幣価値がたちまちに下がってしまう。だから、まず建物を建てる。活動内容や設備はそれから考えればよい」。教会内で強まったこのような意見により、それまで取り組んできた委員会の調査検討は意味を持たないことになった。

## (5)

1981年1月16日(金) 夜に、体がきつくて起きていられなくなる。翌朝血尿が出たので、一日様子を見ることにする。ところが、18日(日) 朝にはコココーラのような色でどろどろとした血尿が出た。状態は明らかに悪化している。そこで一部を紙コップにとり、日曜日ではあったが、塩野まりに高槻医院まで診断のため持っていってもらう。高槻碩夫医師は高槻のおばあちゃんの息子で、毎月診察を受けていた。帰ってくるなり、妻から「すぐ入院するようにとの指示で、高槻先生が救急車を手配してください」と告げられる。急いで塩野まりが入院の準備をしていると、池田憲治君が様子を見に来てくれた。「塩野先生がおられないので、どうしたのかな」と思い、来てくれたらしい。事情を説明すると、「分かりました。救急車を見えています」と言って、4階の廊下から道路を見ている。間もなく救急車が中央団地の前に到着すると、隊員の「下まで降りて来れますか？」と尋ねる声が聞こえてきた。池田君は「降りられませんので、4階まで来てください」と、大きな声で下に向かって叫んでいる。担架を抱えた2名の救急隊員が来てくれたのは、それからすぐだった。

自宅玄関から担架に乗せられて救急車まで運ばれた。初めて乗る救急車のベッドは意外に硬く感じる。その間、塩野まりが横に付き添ってくれていた。運ばれたのは、膳所駅の南西にある津市民病院だった。病院の玄関からは車いすで病室に行く。6人部屋で向かって右側真ん中のベッドだった。同室には40歳前後で心臓病の方や、60歳代で糖尿病のため片足の膝から下を切断されている方がいた。初日は横になっても全身がだる痛く、寝返りを打っても節々が痛かった。それで仰向けになったままお腹の上に手を置いて、息を吐いては「インマヌエル、アーメン！」、息を吸っては「インマヌエル、アーメン！」と称名を唱えていた。すると主治医の榊原医師が来られて、「必要な検査と治療をしていくので、なるべく横になっていてください」とアドバイスされた。

午後になると、情報を聞きつけた教会関係者が次々と面会に駆けつけて下さった。それは退院の日まで続く。アクラ会・婦人会・壮年会・白百合会・青年会の人たちの面会は、大体1回だけだった。それに対して、高校生会とバイブルクラス出席者は毎日のようにやってくる。彼らにとって会堂2階集会室のたまり場が、市民病院の病室に代わっただけのようにも思えた。たまりかねた看護師さんが、彼らに「あまりにも頻繁な面会は病人を疲れさせます」と注意された。それでも、彼らは毎日面会に来た。

夜になると、ベッドとベッドの間にカーテンが引かれる。就寝の合図である。もちろん、病人は眠ることができない。それでも、病人同士の会話はカーテンを合図にして終わる。家族も帰宅する。病室は静かになり、一日の終わりとなる。ただし塩野まりの場合、「自宅に帰ってからが大変だった」と伝え聞いた。電話への対応である。

\*

片足を切断した方は「もう無いのに、切り落とした足が痛むんです」と、足をさすっておられた。数日後に手術を控えていた心臓病の方は、器械を使った深呼吸の練習をするために看護師の控室へ頻繁に通っておられた。手術当日、奥様に付き添われて「それじゃ、行ってきます」とあいさつをして出て行かれた。ところが、予想外の展開となる。手術がうまくいかず、帰らぬ人となられたのである。翌日、奥様は重い空気の張りつめた病室に入って来られた。片付けのためである。同室の入院患者は彼女の顔を見ることができず、伏し目がちに挨拶するのが精一杯だった。

私は血尿が続いていた。全身がだるく、節々に痛みもあった。そのような状況にある種の不安と苦悩を感じていた。けれども不安にとられるのを意識的に避け、「インマヌエル、アーメン！インマヌエル、アーメン！」と称名を唱え続けていた。入院してちょうど1週間が経った日である。称名を唱えていると意識がすーと遠のいていき、大きな渦の中に引き込まれていくような気がした。その時にはいろいろな思い出が走馬灯のように駆け抜けていった。すると渦の向こう側に、私を見つめて立っている人がいる。彼は白い服を着て、両手を広げ微笑みかけていた。無意識のうちに、「これは幻だ。多くの人の祈りが幻となって現れたのだ」と思った。

意識が戻ると、不思議なことに体が軽くなっていた。全身の倦怠感も痛みも取れている。数日後には血尿も止まった。それは主治医の榊原医師にとっても、「予想外の展開だった」と聞かされる。

実は血尿が1週間続いていた時には、人工透析の準備を始めなければならないと考えていました。ところがちょうど1週間後に状態が劇的に改善し、10日後には血尿も止まりました。理由は分かりません。それでも今後2週間程度は様子を見るために、入院を続けていただきます。このまま順調に推移すれば、退院となります。

血尿が止まり数日経った2月2日(月)に、思いがけない面会者が来られた。京都教会の原忠和牧師と京都葵教会の佐原英一牧師である。挨拶もそこそこに原牧師は2枚の写真を出すと、教会からの招聘の話を持ち出された。

原 牧師 愛媛県にある宇和島信愛教会と伊予吉田教会から塩野先生を招聘したいという希望が出されている。1981年つまり今年の4月からである。入院中で判断のむづかしいこともあると思うが、前向きに考えてほしい。

塩 野 退院の目途も立っていないので、今年4月からの赴任となると、責任が持てません。佐原先生はこういう場合、どんなふうに考えられますか。

佐原牧師 招聘という話があった場合には、基本的には引き受ける方向で考えることだと思うよ。

2枚の写真は宇和島信愛教会と伊予吉田教会の会堂を映したものだ。2人は用件だけ伝えと、早々に帰っていかれた。

\*

血尿が止まってからも順調に推移していた。そのような病床でしきりに思い出されたのは、「大きな仕事に出会ったら、それこそ生命を張ってその仕事に向かえ」という柴田さんのアドバイスである。柴田さんは「全力で打ち込んだ仕事は失敗したとしても、必ずこれからのシオノの人生の何かになる」とも言っておられた。そして、思いめぐらしていた。

全力で取り組んだ愛光センター開設準備の仕事はうまくいかなかった。しかし、準備そのものは他の方が担って下さっているので、心配することはない。

失敗して病気になったが、死ぬこともなかった。静養さえしていれば健康を取り戻して、何かをすることはできるだろう。

だから、「失敗しても、必ずこれからのシオノの人生の何かになる」とはどういうことだろうか。

2月7日(土)に、原忠和牧師は再度面会に来られる。前回の話を踏まえて、今回は若干修正した提案をされた。

原 牧師 「退院の目途が立たないので、4月1日着任という日程を確約できない」という申し出は伝えておいた。先方からは「それでも結構です」という返事をもらっている。臨時総会開催という日程を考えると厳しいので、できるだけ前向きの返事をもらえないだろうか。

塩 野 分かりました。「着任時は主治医の指示に従う」という条件を付けて、この話を引き受けましょう。そうすると、大津教会の伝道師招聘の件も生じます。こちらの方もよろしく願います。



塩野まりにはその日のうちに教会転任の話を伝えておいた。

ところが、この転任をめぐる思いがけない反論が出てきた。近江平安教会の谷本一廣牧師である。彼の主張はこうであった。

病气入院中の伝道師に対する今回の人事は人権問題であり、差別問題である。伝道師が病気になるなら、当該教会で静養するのが当然である。身体に障害や病気を負った者を受け入れることで教会の体質は変わる。だから、塩野さんが大津教会に留まることにより、貢献できることはたくさんあるはずである。

谷本牧師のアドバイスは正論で、病人にはありがたかった。しかしどう考えてみても、大津教会に病气療養中の伝道師を受け入れる余裕などなかった。

\*

2月10日(火)に、「1か月は自宅で静養するように」との条件付きで退院した。この条件について堀川牧師と相談し、2月は集会参加をするものあらゆる担当から免除された。3月になって、無理のない範囲で担当を引き受けることになる。

すると、高校生たちのたまり場は伝道師宅となった。しかし、彼らは決して長居をしない。必要な手伝いがあれば、積極的に申し出てくれる。ある時、ジャガイモが必要になった。買い物を申し出てくれたのは池田憲治君である。塩野まりから近くの八百屋さんの場所を聞くと、お使いに走ってくれた。帰ってくるなり、「一番大きなジャガイモを買ってきました」と誇らしげに報告する。確かにずいぶんと大きなジャガイモである。ところが、切ってみると中は空洞である。「いくら大きなジャガイモでも、中が空洞ではいけませんね」と、池田君は頭をかいていた。

2月15日(日)には礼拝に出席した。皆さんが喜んで歓迎のあいさつをして下さる。その時一番印象に残ったのは、高槻のおばあちゃんである。おばあちゃんを除いて、早天祈祷会のメンバーは皆お見舞いに来て下さっていた。だが、その中におばあちゃんの姿はなかった。ただ、1月21日(水)に早天祈祷会から投函された寄せ書きの中に名前を見ることはできた。そのおばあちゃんの顔がうれしさと輝いている。それは神々しくさえあった。入院中どんなに祈って下さっていたか、その顔が語っていた。

3月になると、塩野伝道師転任の話が伝わる。多くの方から別れの挨拶を受けた。

3月6日(金)には、板倉きくさんからお便りをいただいた。

でも決してご無理はなさいません様に。

一年位はとても大切になさって下さいませ。

長い人生のほんのひと時だと思って、……。

ゆめゆめ私の言葉をお忘れなく、……。

3月10日(火)には、袖岡こうさんから言葉をかけていただいた。

長くいれば、それだけでも役に立つものです。

決して無理はしないことです。

私のような年になりますと、何もかも楽しく思い出されます。

3月17日(火)には、沼尾瑞江さんが声をかけて下さった。

もうお会いすることはないかもしれません。お元気で……。

同じ日に大矢正和先生も声をかけて下さった。

これが最後かもしれません。

大津市民病院で榊原医師から最後の診察を受ける。入院中の記録をまとめた書類を受け取り、転任の際の旅行と宇和島でかかる病院についてアドバイスを受けた。

3月29日(日)が訣別説教となる。マタイ福音書1章23節をテキストにして、「インマヌエル、アーメン」と題して宣教を試みた。「インマヌエル、アーメン!」、それは入院中のベッドで吐く息と共に、吸う息と共に唱えていた称名である。祈りが呼吸のように心身を満たす中で、もう一度生かされる救いを経験した。その感謝を込めた宣教である。

3月31日(火) に大きなトラックが中央団地に横付けされた。宇和島信愛教会の前任栗原昭正牧師の荷物を群馬県高崎まで運んだ帰りのトラックである。多くの教会員に手伝っていただき、引っ越しの作業を終える。そして皆さんに見送られて、大津の地を後にした。



松原竹生・松原栄「二人こけし」  
(饞別としていただいた作品, 1981年3月)